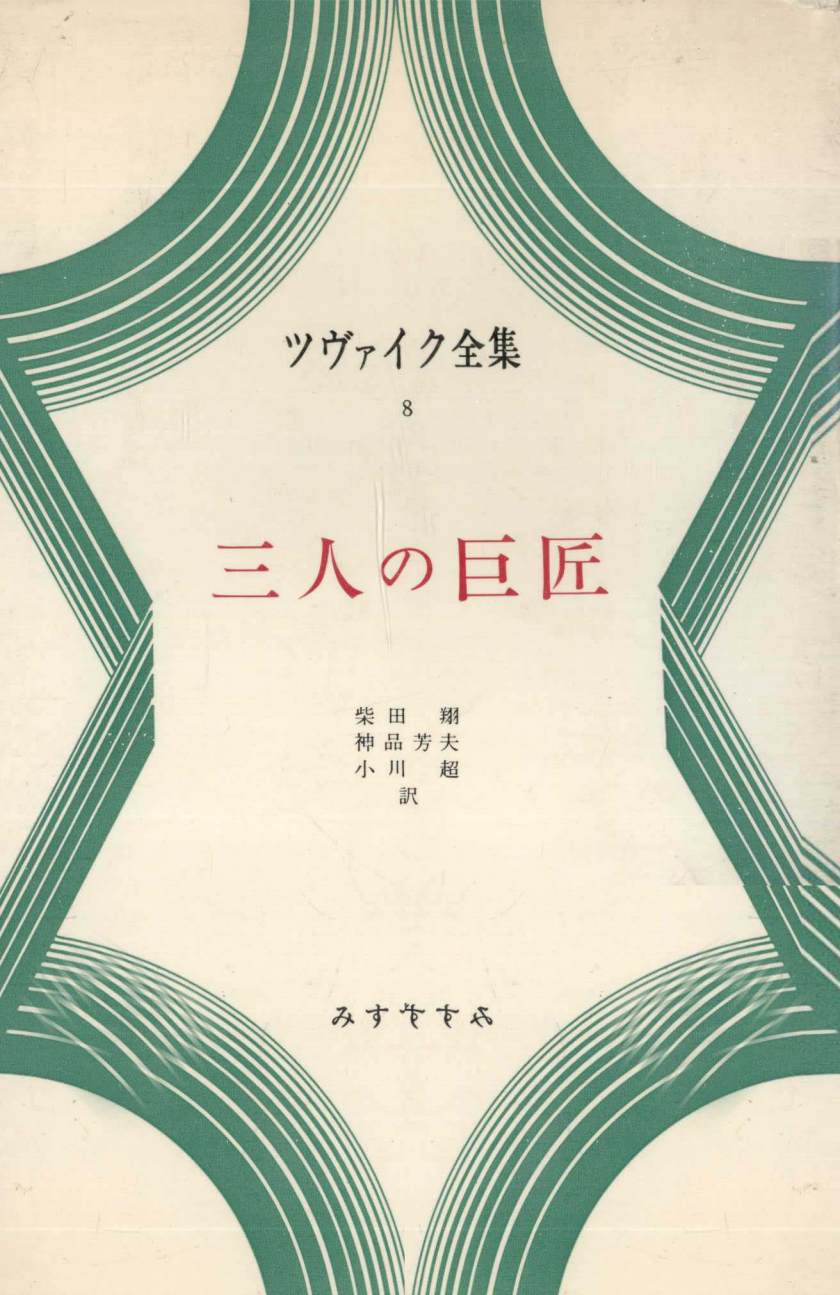




ツヴァイク全集

8

三人の巨匠

柴田 翔
神品 芳夫
小川 超
訳

みすめすゐ

三人の巨匠

柴田 翔
神品芳夫 訳
小川 超

みすず書房

ツヴァイク全集 8

三人の巨匠

柴田 翔
小川 超
神品芳夫
渡辺 健
共訳

1974年7月20日 印刷

1974年7月30日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京 195132

本文印刷所 理想社印刷所

扉・カバー・表紙印刷所 栗田印刷

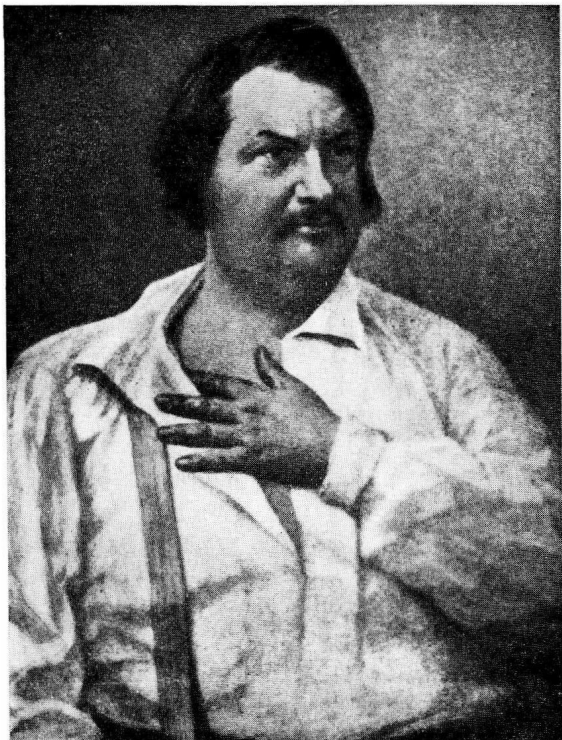
口絵印刷所 京美印刷

製本所 鈴木製本所

© 1974 in Japan by Misuzu Shobo

書籍コード 0398-00081-8005

落丁・乱丁本はお取替えいたします



Honoré de
Balzac

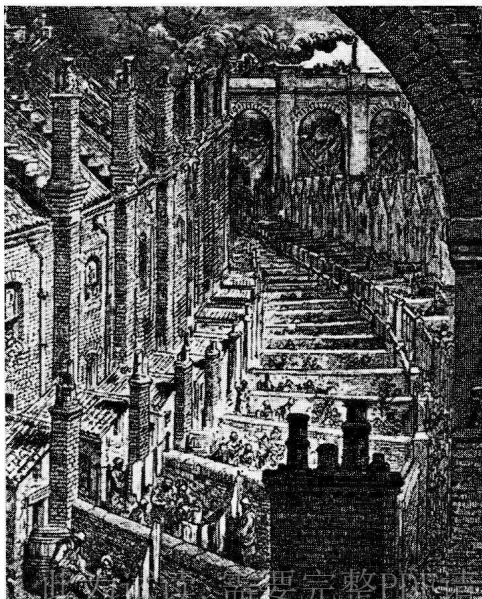
1799 - 1850

銀板写真によるバルザックの肖像と、1850年
6月20日に書かれた彼の最後の筆蹟。

Honoré de Balzac
 je n'ai rien
 écrit, ni écrit

Charles
Dickens

1812 - 1870

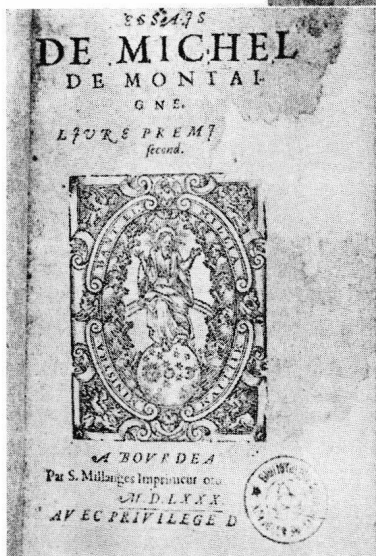


サミュエル・ローレンスによる
25歳のディケンズ。この年の前
年から刊行の『ピクウィック・
ペイパーズ』により文名あがり、
つづいて『オリヴァー・ツウイ
スト』の発表を開始する。

ギュスタヴ・ドレの手になる当
時のロンドンの貧民街。ディケ
ンズの代表作『オリヴァー・ツ
ウイスト』の精彩ある舞台。

Michel Eyquem de
Montaigne

1533 - 1592



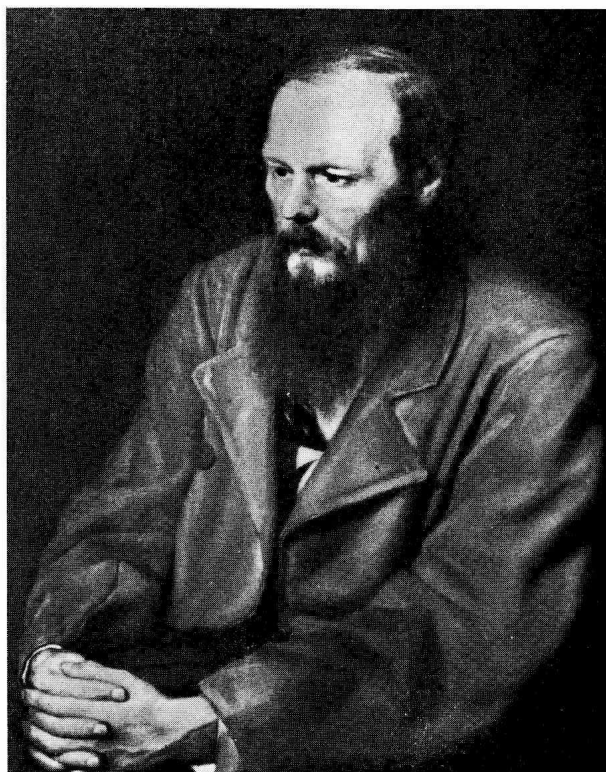
16世紀のフランス派の画家の手による
モンテーニュの肖像と、1580年に出版
された『随想録』第1巻の初版の表紙

24. Schluß. Merkwürdig. Ha. Was empfand.

- 1) Ha. empfand pyetisch Kondur
- 2) Ha. empfand Kary. o. Leger-Herrens
- 3) Ha. empfand oben Brunnens. o. o. i's
- 4) Ha. empfand noch Opotobinder.

15) (Ha. empfand Kary. o. Leger-Herrens
 "opetobinder" opotobinder. o. Leger-Herrens
 10/10 empfand Kary. o. Leger-Herrens, o. Leger-Herrens

ペトロフ筆のドストエフスキーの肖像と、1877年
 12月24日付の備忘録。



Fedor
 Michailowitsch
 Dostojewski

1821 - 1881

目次

三人の巨匠

バルザック・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

ディケンズ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

ドストエフスキー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

モンテニユ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・265

年譜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・373

解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・383

精神世界の建築家たち（I）

三人の巨匠

バルザック・ディケンズ・ドストエフスキー

バルザック

柴田 翔 訳

バルザックは一七九九年、自然の幸のみちあふれる土地ツレーヌ、ラブレーの晴れやかな故郷に生まれた。一七九九年の五月に、とくりかえそう。この日附は重要である。当時まだボナパルト將軍と呼ばれながら、すでに不穩の氣をあたり一帯にただよわせていた未来の皇帝ナポレオンは、この年にエジプトから、半ばは勝利者として半ばは逃亡者として本国に戻ってきた。異国の星座の下、黙して語らぬピラミッドの見守る前で彼は戦い、やがてひとたびは華々しく始めた企てを粘り強く成しとげることにもうみ疲れ、ネルソンの快速船の待ちうかがう間をわずかにボロ船に身をかくして逃れ帰り、そして帰ってのち数日をいわずして、ひとにぎりの腹心をかきあつめ、反抗する国民議會を肅清し、一瞬のうちにフランスの支配權を我が手に握った。バルザックの生まれた年一七九九年はナポレオン帝政の始まりを告げる。新しい世紀の見るのは、もはや「ちっちゃな將軍」もはやコルシカ生れの冒險好きではなく、ただナポレオン即ちフランス皇帝のみである。その後十年、十五年——つまりバルザックの少年時代——が過ぎれば、ナポレオンの権力

に渴えた手はヨーロッパの半ばをおさえ、彼の榮譽に憧れる夢は驚の如く力強くはばたいて、アジアからヨーロッパに至る全世界をおおっている。すべての出来事をあれほど強く感じとり、自己の内的体験と化する人、バルザックのような人にとって、生まれ落ちてはじめて世界を見廻す十六年がナポレオン帝政の十六年、おそらくは世界史上のもっとも色どり華やかな一時期、とびつたりと一致したということが、何の痕跡も残さぬはずはない。宿命と幼少の頃の体験——この両者は本来同じ一つのものの二つの面に過ぎぬのではないか。一人の男が、名もない一人の男が、青く輝く地中海のある名もない島からバリへとやって来る。そしてそこで、時しも手綱をはなれて荒れ狂う権力の鼻頭をむんずとつかみ、その向きをぐりと変え、それを見事に御してしまふ。名もない一人の男が、何の伝手も持たぬよそのものが、素手一貫でバリを得、そしてフランスを、そして全世界を手に入れる——こうしたアバンチュールにみちた世界史の気まぐれ——それを彼バルザックは味けない活字を通しあやしげな神話や歴史物語とごたまぜにして学んだのではなかった。それらの事件は色どりもはなやかに、彼の渴いて外界に打ち開かれた感覚のすべてを通して彼の日常生活の中へ流れ込み、彼のいまだ無垢なる内的世界は何千とも知れぬ色とりどりの事件の記憶に充たされた。こうした体験は少年にとって「お手本」とならずにはいない。少年バルザックが読み方をならったのは、誇らしげに厳しげに、ほとんど古代ローマ風的情熱をもつて、遙かなる異国での勝利を告げている布告書によってであつたかも知れぬ。彼の子供らしい、

いまだ不確かな指は、フランスから全ヨーロッパへと洪水のように広がって行くナポレオンの兵士たちの行進のあとを地図の上に辿ったろう。その子供らしい指は、今日はセニ山を越え、明日はネヴァダ山脈を斜めに横切り、流れを越してドイツへ、雪をおしてロシアへ、更にはジブラルタルの海を越そうと目指し、そしてそこでナポレオンの艦隊がイギリス人の集中砲火を浴びて火につつまれるさまを感じとる。また昼間街角で彼と遊ぶ兵士たちの顔には、コザック兵の振りおろしたサーベルの痕が刻まれ、夜の夢路をやぶる時ならぬ物音は、ロシアの騎兵隊の足元に張りつめる氷の厚板を打ち砕こうと、オーストリアはアウステルリッツへと急ぐ砲車の響きであったかも知れぬ。彼の少年時代のすべての渴望は一つの心ゆすぶる名前、一つの思想、一つの観念の中へ、即ち、ただ「ナポレオン」の中へ、溶けそそぎ込まれたに違いない。パリから世界への道を開く壮大なコンコルド広場の前には凱旋門が高々とそびえ、世界の半ばをおおう被征服国の名がそれに刻みこまれる。そして、こうした覇者の感情——どうしてそれが、やがて見知らぬ国々の軍隊がこの誇り高きアーチの下を行進し来たった時、恐ろしい失望へと変わらないで済んだだらうか。外の、嵐吹きあれる世間での出来事は、内においては体験となる。年若くしてバルザックはすでに、精神的にも物質的にも価値体系の恐るべき逆転を経験した。彼は共和国の名において金貨百フラン千フランが約束されていたアッシニア紙幣が、今は一顧の価値もない紙片として風に舞うのをみた。彼の手の中で鳴る金貨の表には、ある時は断頭台に命を断たれた王の肥満し

た横顔があり、ある時は自由を告げるジャコバン派の帽子が刻まれ、やがてそれは統領のローマ風の肖像となり、またやがては皇帝の礼装をつけたナポレオンと変った。こうした恐るべき変転の時代——道徳、貨幣、国土、法律、階級、何世紀来ゆるぎなきはじめの中に位置づけられてきたすべてのもの、それらがはじめを乗り越え、押しやぶり、氾濫しはじめた時代——そうした前代未聞の変転の時代にあつて、彼は早くも幼少にしてすべて価値というものの相対性を悟らずにはいなかった。彼をとりまく世界は目くるめくような混乱であり、その中に一つの展望を求め、一つのシンボルを求め、荒れ狂う波の上に輝く星座を求めてもうろうとした眼差しをさまよわせれば、この紛糾する諸事件の中に、ただ一人の姿が、ただ行為するものが、ただ彼があり、何千とも知れぬ騒擾と動乱はみなそこより発生しているのであつた。そして、ナポレオンその人をも、バルザックは目撃した。馬上のナポレオンは自らの意志が生み出したところの王侯たち、スベインを贈ったジョセフ、シチリアを与えたミュラー、エジプト王ルスタン、未来の裏切者元帥ベルナドットら、すべて自分の手が王冠を戴かせ、王土を与えた王侯たち、ただ自分の手によってのみ無為に過ぎていた過去から現在の栄光の中へ引き上げてやった王侯たちを引きつれて少年の前を行進し過ぎて行つた。一瞬のうちに少年バルザックの網膜には、史上いまだその比を見ぬ壮大な絵画が焼きついた。彼は偉大な世界征服者を目撃したのである。そして、一人の子供にとって世界征服者を目撃するとは、とりもなおさず、自らもそうなろうと願うことではないのか。この